

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.11

保育者としての 歩みを振り返る



伊集院理子



シリーズ「保育をつなぐ」は、連載10回を重ね、幼稚園教諭、保育士、養護教諭、事務職員等、お茶の水女子大学附属幼稚園にかかわるさまざまな立場の方に、リレー方式で執筆をお願いしてきました。

第11回は、旧職員である伊集院氏の登場です。筆者は附属幼稚園で、教員、管理職として長く勤務し、その後、大学教員、私立幼稚園長と立場を移して幼児教育に携わり続けています。

本号では、一人の保育者が附属幼稚園とかわり紡いできた縦横の糸を、『幼児の教育』誌とのつながり、附属幼稚園における実践と研究のありよう、立場を変えてのその後のつながり等、多角的に綴ります。これから研究を深めようとしている園や施設の方々にも参考となることが、たくさん詰まっているのではないのでしょうか。もっと伝えたいものが、しかし誌面の都合で語り切れないところは、ぜひ、次の機会につなげていかれたらと思います。

*

伊集院理子（いじゅういん みちこ）
十文字女子大附属幼稚園園長。
元お茶の水女子大学附属幼稚園副園長。

私は、長年お茶の水女子大学附属幼稚園の教員として勤務してきました。その後大学の教員を経て、現在は私立幼稚園の園長として再び保育の現場に戻ってまいりました。

30年以上にわたる保育者としての歩みをこの機会に振り返ってみようと思います。

担任1年目の文章から

初めて担任した子どものことを『幼児の教育』第88巻第3号（1989年）に書かせてもらっています。年中の生活が軌道に乗ってきた6月中旬、実習生を迎え、人手があるところで、絵の具を初めて出したときのことです。年中組から入園して友達が遊んでいる様子を見ることが多かったA子が、子どもたちが使った絵筆を洗っている私の所に来て「手伝ってあげる」と言って熱心に筆洗いをしてくれたこと、次の日、他の子どもたちが描き終わった後、テーブルの上に敷いてある

新聞紙の上にこっそりと描き始めたこと、少しして「白い紙ちようだい」と言ってきたインナミックな絵を描き上げたことなどが綴られています。文章の最後に「この一連のAちゃんの行動は、自分からやりたいと思う機が熟するのを待つことの大切さ、そして、自然な形でそれぞれの子どもの機が熟するようにするためにも、その日限りではなく、日々の保育を継続的に展開していくことの大切さを教えてくれました」とまとめられています。

『幼児の教育』と私の成長

附属幼稚園の教員は『幼児の教育』（当時は月刊）に順番で寄稿することになっていました。ですから自分の番が回ってくると、必然的に遊びの中で子どもがしたこと、自分がしたことの意味を考え文章化せざるを得ない状況がありました。

保育者になりたての頃は目先の対応に追わ

れていましたが、ある程度経験を積んでからは、遊びの中で子どもたちの表情、立ち居振る舞い、行為などをじっくり見ることを心がけ、外側から見ているだけではなく、子どものやっていることを同じようにやってみたり、一歩先に違う行為をして子どもの反応を見たりしながら、今子どもが心を傾けていることに近づけるようにとかかわってきました。そして、その時々に関心を持って『幼児の教育』に書いてきました。「呼応しあう関係をめざして」「生活者としての子どもたち」「保育の中のつながりを求めて」「『みんなの中の私』ということ」など。いろいろ考えて文章に残してきた事例は、鮮明に私の中に映像として残っています。今でもその時のことが体感としてよみがえってきます。

『幼児の教育』に原稿を書くことが節目となり、保育者として成長させてもらってきたのだと、今振り返ってあらためて思います。

園内研「保育カンファレンス」

『幼児の教育』への投稿だけではなく、園内研究会であげた事例の中にも心に深く残っているものがあります。

私が保育者7年目の年、研究主任が中心になって保育実践を語りあう保育カンファレンスをもつようになりました。カンファレンス1年目は「望ましい保育のあり方」に収束していかなければという構えがあり、その時間は気が重く苦痛でもありました。2年目に入り、どうしてもまとめておきたい工夫との間の出来事があり、詳しく一つの事例に書いてカンファレンスの場にあげました。この事例を自分の納得のいく形でまとめ上げられたこと、それをカンファレンスの場で同僚に検討してもらったことが自信になって、事例を書くこと、カンファレンスの場に事例をあげることに抵抗がなくなりました。それから心に

引つ掛かったことを深く考え事例にまとめることにやりがいを感じるようになっていきました。その時のカンファレンスの感想が文章として残っています。

カンファレンスを重ねるうちに、保育を通しての思い、感覚を素直に話し合えるようになっていった。その中で、お互いの事をより深い部分で理解できるようになり、自分たちの中にある共通性も浮きぼりにされていった。実際の保育の中でもカンファレンスの中でも、頭の中の理解を超えて、自分の感覚として実感できたことは、保育の現場で必ず生きてくると思う。

なかなか表れてくれない保育の中の手応えを見つけだすには、子どもとの触れあいの中で、保育者が自分の身体を通して感じ取れる感性をみがいっていくことが何よりも大事だと思う。その感性をみがく上でも、自分だけの枠組みの中での思考、感覚を超え、他の保育者の飾らないありのままの思考、感覚にたくさん出会えるようになってきた私たちのカンファレンスは、今後さらに大きな役割を果たしてくれると思う。

『お茶の水女子大学附属幼稚園 保育の研究 第1巻 平成8年度』

その後、カンファレンスを立ち上げた先輩の後を継いで、私は研究主任として園内研究を牽引する立場になりました。

その際、自分の経験から一つの方向性を引き出そうとするのではなく、子どもたちとかかわりながら感じたこと、考えたことを飾らずに率直に語れるような雰囲気づくりを心がけました。テーマを決めて事例を集める方法ではなく、その時気にかかっていること、「これだ！」と思ったことなどを出しあうこと、参加者の発言を強制しないこと、自分の考えを前面に押し出さず聞く側がいろいろ考えるように投げかけることなどを意識して研究会を運営していきました。

その後、園として文部科学省の開発研究「幼小連携」を引き受けざるを得ない状況になりました。副園長になってからは、全国の附属幼稚園で受けた文部科学省委託研究「幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究」を

中心になってまとめなければならぬ立場も務めました。どちらも研究としての形にとらわれずに常に軸足は目の前の子ども達の姿、子ども達の実際に置くこと、そこから見えてきたことをまとめ、心を心がけました。外から課せられた研究を中心になってまとめなければならぬ重責に四苦八苦したこともありましたが、やり遂げてみると、子ども達の今を最優先に考えてやったことは、園全体の大きな力にも、自分自身の力にもなりました。

新しい職場で

定年退職を迎え、大学の教員になってからは、実践事例はたくさんもっているのに、教えなくてはならない内容の縛りもあって、臨場感をもって事例を語れなくなってしまいました。現場上がりとして、自分が経験してきたことを学生に語ることが自分の使命だと強く思っていただけに、納得できるような授業

ができずに、苦い思いだけが残りました。そのような時、子どもたちが生き生きと生活している環境が自分をいかに前向きにさせてくれていたのか、子どもたちがどれだけ私を支えてくれたのかを思い知らされました。自分らしく生きるために、大学の仕事は2年で区切りをつけて、十文字女子大附属幼稚園のアドバイザー兼フリー保育者を経て、今は「子どもたちと一緒に目いっぱい遊ぶ園長」として過ごしております。

私自身一つの現場で長く過ごしてきましたが、十文字の附属幼稚園も長らく勤めている保育者が多く、当たり前のこととして踏襲されていることがあり、子どもにとってどうなのかということを開き直す必要を感じました。最初の年はアドバイザーという立場だったので、気づいたことを率直に投げかけたり、園に眠っているものを見つけて出しさげなく環境に置いてみたり、いろいろな局面で子ども

に直接かかわってみたり、実際に行動することを心がけてきました。バス通園もある園なので、年少中長2クラスずつあるのに生活時間はずれているため、どうしてもクラスごとの生活が中心になりがちであり、園全体がもつつながりあうことができないかと考えていろいろ提案しました。一例として、柿やミカンなど園庭の実りを保育者が段取りして各クラスで食していたのですが、園庭で年長児が収穫して、その場でむいてお店のようにして食するようになりました。

保育の質をさらに上げていくためには、園の保育者同士が率直に保育の中で考えたこと、感じたことを交流する場を設定する必要があると考えました。そこで、学期末などに各クラスの印象的な保育場面を語りあう「保育を語る会」を重ねてきています。最初は語りやすいように、各クラスの保育写真をピックアップしてそれを見ながらその前後のことも加

えて語りあえるようにしました。直近の「保育を語る会」では、わがクラスのとっておきの「学びの物語」と題して事例にまとめてもらい、それをもとに語りあったりしました。各クラスの気になる子どもについては、特別支援教育を専門としている大学の先生を交えてケースカンファレンスも重ねてきています。

「月1回のケースカンファレンス、学期ごとの保育の振り返りなど、各クラスや個人についての語り合い・学び合いの機会が増え、同時に各クラスの状況や担任の思いなどを知る・伝える・伝えられる機会になっている」という言葉が、昨年度の園としての自己評価に寄せられていました。

自分の保育者としての歩みを振り返ってみて、保育を高めていく上で欠かせないことは、保育を文章化することと、同僚との保育についての語らいたとあらためて確信した次第です。